

## 敦煌本脈書小考

——ロシア藏文獻と『平脈略例』を中心に

岩本篤志

### はじめに

唐の醫疾令には醫針生が學ぶべき醫藥書が明示されており、そのなかに西晉・王叔和の『脈經』やその抄出によるとされる『脈訣』がある。醫疾令には地方でも中央と同等の醫術の教育が行われるよう規定されていた。（宮下三郎〔1963〕、丸山裕美子〔2009〕）

その姿をうかがわせるのが現行の『脈經』全十卷である。すでに先行研究において、撰者王叔和の自序と宋代の校訂作業の過程の検討を踏まえ、各卷の性格が個別に分析されている（小曾戸〔1981〕、同〔1996a〕）。その成果によれば、全體の56%が『素問』『靈樞』『難經』『傷寒論』『金匱要略』と一致し、卷七・八・九は古態の『張仲景方』に由來するとされている。一方、卷十は先行書との重複が見られず、後代による追加と疑われるという。

しかし、その成立過程や變遷は必ずしもあきらかではない。その點では、宋代以後の手が加わっていない醫藥史料である敦煌醫藥文獻が注目される。

ところで筆者はこれまでに敦煌本『新修本草』の書寫年代とその用途を中心に考察をおこない、唐と敦煌における『新修本草』のあり方をさぐってきた。『新修本草』は『本草集注』を繼承した醫藥書であると同時に、各地域で産出した有用藥材を唐皇帝の世界觀において把握することを意識して編纂された。また、敦煌におけるその用途は、敦煌本『新修本草』の形態や書寫狀況から、主として寺院における醫療活動・農業活動において利用されていたと論じた。（岩本〔2015: 274-279〕）。

では本草書以外の敦煌醫藥文獻はいつ、どのような人たちに利用されていたのか。史料の形態や内容の分析から書寫者の姿に迫ることは敦煌における醫藥書の位置づけを知る上でも東アジアの醫術史を知る上でも重要であろう。

本稿で扱う脈書とは、人體に「脈」の存在をみて、それを治療に利用することを目的とした醫書の一種で、中原に發達し、戰國期の竹簡類においてすでに基本的

な形を整えていた。敦煌文獻にも數種の脈書斷片が含まれており、そうした知識の擴大・浸透を知る手がかりといえる。ここでいう脈書とは『舊唐書』經籍志および『新唐書』藝文志においては明堂經脈類に屬し、脈診法に重點をおいた典籍を指し<sup>1</sup>、典籍名には「脈」字が含まれていることが多いものとする。ただし、明堂經脈類には鍼灸による治療を示した明堂・鍼（針）經・灸經・五臟論が含まれるが、本稿ではこれらは対象にふくめない<sup>2</sup>。

これら斷片の綴合や各斷片については研究者が個々別々に発表しているのが現状で、相互の研究は十分批判統合されていない。

本稿では、以上の關心と問題設定の下、これまであまり注目されていなかったロシア藏敦煌本脈書の位置づけを中心に、他館所藏品と比較・整理をおこなうことで敦煌醫藥文獻が実際にどのように利用されたのか、その實態に迫りたい。

## 一、敦煌本脈書の先行研究と俄藏 Дх2869、Дх8644

### (1) 敦煌本脈書に関する先行研究

敦煌本の脈書について、特に重要な先行研究として、三木榮〔1959〕、小曾戸洋〔1996a〕〔1996b〕、眞柳誠〔2007〕、王淑民〔1987〕〔2001〕〔2012〕、李應存〔2008〕、馬繼興〔2015〕<sup>3</sup>の研究がある。

小曾戸〔1996b〕は敦煌本醫書に関する網羅的な研究だが、執筆時の時代的制約から英藏の6500番臺以降や俄藏文獻を含んでおらず、その他の研究は一部を対象

<sup>1</sup>例として『舊唐書』經籍志・明堂經脈類をあげると以下のとおり。(本稿で扱う脈書に分類できるものには下線を引いた。ただし脈書については、經籍志類に載る書名と敦煌文獻のそれが完全に一致しているものはない) 黃帝三部針經十三卷(皇甫謐撰)、黃帝八十一難經一卷(秦越人撰)、赤烏神針經一卷(張子存撰)、黃帝明堂經三卷、黃帝鍼灸經十二卷、明堂圖三卷(秦承祖撰)、龍銜素針經并孔穴蝦蟆圖三卷、黃帝素問八卷、黃帝內經明堂十三卷、黃帝雜注針經一卷、黃帝十二經脈明堂五臟圖一卷、黃帝十二經明堂偃側人圖十二卷、黃帝針經十卷、黃帝明堂三卷、黃帝九靈經十二卷(靈寶注)、玉匱針經十二卷、黃帝內經太素三十卷(楊上善注)、三部四時五臟辨候診色脈經一卷、黃帝內經明堂類成十三卷(楊上善撰)、黃帝明堂經三卷(楊玄孫撰注)、灸經一卷、鈴和子十卷(賈和光撰)、脈經訣三卷(徐氏撰)、脈經二卷、五臟訣一卷、五臟論一卷。右明堂經脈二十六家凡一百七十三卷。

また、小曾戸〔1996〕が、「脈書」と分類した一群が本稿であつかうカテゴリに該当する。

<sup>2</sup>本稿で対象外とした明堂・鍼（針）經・灸經については、最近刊行された眞柳〔2014〕が先行研究や寫真を用い、詳細な分析をおこなっている。とくに眞柳〔2014：451-457〕では、Дх235、Дх239、Дх3070、Дх6634、Дх11538bに言及し、4～5世紀の書寫としている。筆者はДх235、Дх239、Дх3070を實見しており、その際の印象では、紙質は漉きむらはあるものの比較的良質で背面はいずれも使用されておらず、書體は波磔のある北朝以前の古體であり唐代や歸義軍期の料紙、字體ともに異質であった。眞柳が指摘するように吐魯番文獻の可能性もあろう。

<sup>3</sup>馬繼興〔2015：上125－139〕に「敦煌寫本的『平脈略例』及其近似文獻」が収録されている。

としたにとどまっている。馬〔2015〕は、資料寫眞を網羅的に載せたうえで釋文を示しており、今後の出土醫書研究のあるべき姿を示しているとはいえるものの、必ずしも馬〔1998〕以降の研究のほとんどを参照していない。

とりあえず、以上の先行研究を総合すると、敦煌本脈書またはその関連資料として次の16點をあげることができる。このうち4點は、王〔2001〕によって綴合が確認されているので件数としては以下の12件を数える。

- ① P.2115、② P.2815v、③ P.3287、④ P.3477、⑤ P.3481、⑥ P.3655、
- ⑦ S.202、⑧ S.5614、⑨ S.6245+S.9431+S.9443+S.8289、⑩ S.10527、
- ⑪ Дх2869 (II)、⑫ Дх8644

次に文獻番號順でなく、その特徴別にこれらを取り上げておきたい。

敦煌本脈書類のなかには、見出しが記されているものがあるので、まずそれらからみていく。見出し名として「玄感脈經」「七表」「八裏」「三部脈」「青烏子脈訣」「平脈略例」がある。これらが書名か篇名か考える必要があるが、判断は後述する。とりあえず、これらは見出しごとに整理された内容とみなすことができる。

「玄感脈經」は、④ P.3477に書寫されている。王叔民〔1987〕によると、『舊唐書』經籍志に『玄感傳尸方』一卷、『新唐書』藝文志に『玄感傳尸方』一卷と『鐵粉論』一卷、『宋史』藝文志に『玄感傳尸方』一卷と『玄感論』一卷があり、いずれも蘇游なる人物が撰者とされていることから、玄感を蘇游の字と推論したという羅福頤の説を紹介している。蘇游については未詳であるが、これは書名とみなすことができよう。なお、馬繼興〔2015〕は④ P.3477「玄感脈經」が「平脈略例」と内容が近似していると指摘する<sup>4</sup>。

「七表」「八裏」「三部脈」「青烏子脈訣」については、⑥ P.3655に書寫されている。⑥ P.3655の形態は折本でこれは敦煌文獻では寫經類に多い。「明堂五臟論」「七表」「八裏」「三部脈」「青烏子脈訣」の順に見出しがあり、複数の醫藥書からの抜抄によって構成される。七表、八裏とは、具體的な脈狀を示すもので、『脈經』に示される二四脈のうち主要なものに当たる。三部とは、『脈經』では寸・關・尺のことを指し、脈診の部位のことである。⑥ P.3655では「七表」「八裏」「三部脈」はそれぞれ獨立した見出しになっているが、従來の研究ではこれらは一連の具體的な脈狀や脈診法を示すものとして、「七表八裏三部脈」と命名している。

「青烏子脈訣」の青烏子とは、漢代の堪輿家とされる人物で、魏晉五胡期の鎮墓文などにもその名がみられる（余欣〔2006:126〕）。史書や墓誌などでその實在は確認できず、その名の下に醫術と墓葬の技術が記されているのは傳説的存在に假

<sup>4</sup>馬繼興〔2015：上127-128〕

託されたものと思われる。その背景には一定の共通の世界観やグループが想定される。おそらくは道教的な系譜に属する集團の存在があるように思われるが、それが書寫者とどのような関係にあるかは不明である。

「平脈略例」は、① P.2115、⑧ S.5614 にあり、いずれも『五臟論』と併せて書寫されているという特徴を持ち、獨立した書名ではないかと思われる。特にこれに関連して、⑦ S.202 と⑧ S.5614、⑨ S.6245 を扱った三木〔1959〕は、S.202 が『傷寒論』辨脈法と『金匱玉函經』辨脈とに近似することを見出すとともに、⑧ S.5614 において『張仲景五臟論』につづけて『平脈略例』が書寫されていることに注目した。そして S.202 と S.5614 は「張仲景系統」の傳承による醫術知識とみなした。

一般に『傷寒論』は張仲景の書として知られる。しかし、三木は張仲景の書として宋代に校訂された『傷寒論』の文章には錯誤が多く、論理が必ずしも一貫していないとし、むしろそれ以前の姿を伝える敦煌本に「張仲景系統」の傳承が見いだせるとした。つまり、張仲景『傷寒論』の原姿は失われたが、張仲景が脈論に貢献したことを讃えて、それを繼承またはそれに假託した諸説（その一種が敦煌本）が出現し、宋代になってそれらが統合・整理され、現行本『傷寒論』の成立に至ったと推理したのである。

また三木は、歴代經籍志を精査したうえで「推論の飛躍が許されるならば」と前置きし、「平脈略例」一卷は「五臟論」一卷と併（なら）んで「八史藝文志」に記す「張仲景脈經一卷」に当たる」と想定した。この指摘のとおりであれば S.5614 と同内容の① P.2115 にもあてはまることになる。

さらにこれに関連し、小曾戸〔1981〕、同〔1996〕が、現行本『脈經』（仿宋何大任本）の分析をおこない、その卷二第一および卷二第三などは、他の先行醫藥書と異なる文章からなりたつ『脈經』オリジナルの部分で、それらが敦煌本⑩ S.5614、⑪ S.6245 と酷似していることを指摘した。このことは現行本と敦煌本との関係性を考える上で注目される。

そして、王淑民〔2001〕〔2012〕は、⑪ S.6245+S.9431+S.9443+S.8289 の綴合を確認した上で、それが上記の敦煌本『平脈略例』とは異なる部分があり、むしろ王叔和『脈經』の卷二第一「平三關陰陽二十四氣脈」に近いとし、「占五臟聲色源候」「五臟脈候陰陽相乘法」に該当する部分があることを示した<sup>5</sup>。

これら王淑民〔2001〕・同〔2012〕の研究は、當時、精査されていなかった英藏敦煌文獻の 6500 番臺以降にいち早く眼を向け、既知の醫書との比較によって、それにもとづく定名をつけたものであり、注目すべき成果であろう。ただ、上述の小曾戸〔1981〕、同〔1996a〕は、中國古代醫書の間にはしばしば同様の文章が参照

<sup>5</sup>馬繼興〔2015〕は、S.6245+S.9431+S.9443+S.8289 が綴合することに言及していない。

され、その前後引用関係を明證するのは容易でないことから、斷定的表現を敢えて避け、「諸經に見られる」という表現にとどめた。これは王〔2001〕・同〔2012〕の姿勢とは對照的である。

現行本の王叔和『脈經』が古くから現在に至るまでそのまま流布、傳承されてきたわけではないことが廣く認識されている以上、現行本と一致することだけを根據に、題名不明の敦煌文獻を『脈經』と見なすのは確かな手法ではない。逆に現行本がその資料（題名不明の敦煌文獻）の類の寫本によって、宋代に補正された可能性も排除できない

また、小曾戸〔1996b〕は、③ P.3287 に『素問』『傷寒論』『脈經』に關連する文を認め、とくに『脈經』卷二第三の記載と深い関係をもつことを指摘した。そのほか⑤ P.3481 が『脈經』の殘文とする先行研究を否定し、脈書の類の可能性はあるものの、現存する殘部だけからでは、それ以外の醫書との関係も視野に入り、書名の同定は困難とした。

②の背面 P.2815 は、歸義軍節度使の張議潮期の國忌行香に關する下書きで、その料紙を二次利用して醫書の一部を抜き書きしたものが② P.2815v である。上海古籍出版社の『法藏敦煌西域文獻』は「診脈醫書」と命名したが、BnF〔2006〕は、理由は示さないものの『平脈略例』からの引用としている。

また、⑩ S.10527 については、榮〔1994〕で『脈經』とされたが、王〔2012〕はその内容から「鼠漏脈證殘卷」と命名した。

さらに李應存〔2008〕は、⑪ Dx8644 に王叔和『脈經』の一部との類似をみて「脈經節選本」とし、⑫ Dx2869 (II) は脈論について述べていることから「脈書殘本」と名付けた。なお、李〔2008〕は、Dx2869 (II) を Dx2869 A と表記する以上が先行研究で、次のように整理できる。

- ・見出しがあるもの（④玄感脈經、⑥七表八裏三部脈・青烏子脈訣、①⑧平脈略例）
- ・『平脈略例』または張仲景系統の脈書とされるもの（⑦⑧⑨）
- ・王叔和『脈經』と關係性があり「鼠漏脈證殘卷」と命名されうるもの（⑩）
- ・複数の斷片が綴合し、王叔和『脈經』の「平三關陰陽二十四氣脈」に酷似するもの（⑪）
- ・『脈經』に關連する内容といえるが『脈經』とは斷定できないもの（③⑤）
- ・『平脈略例』の抜き書きとみられるもの（②）
- ・王叔和『脈經』の一部または脈書の類と認められるもの（⑪⑫）

敦煌脈書の多くがいくつもの書籍から書き抜かれて構成されているためこのよ

うに複雑になったが、要するに、先行研究の関心は、敦煌本が王叔和『脈經』等どのような関係にあるかという点にあった。

しかし、筆者の関心は敦煌醫藥文獻がどのような社會環境で運用されたかということにあり、その媒體である料紙の利用方法にも興味があった。そこで2011年9月に英國圖書館で、S.9431、S.9443、S.8289ほか醫書斷片を、2012年2月にロシア科學アカデミー東洋學研究所サンクトペテルブルク支部を訪れ、Дx8644およびДx2869 (II) とそのほか醫書斷片を閲覽し、この問題を考える手がかりを求めた以下ではそれら知見をもとにして、これまでほとんど注目されていない<sup>①</sup> Дx8644、<sup>②</sup> Дx2869 (II) をとりあげ、敦煌における脈書の考察をすすめることとしたい。

## (2) 俄藏 Дx8644、Дx2869 (II) と S.5614 の関係

先にこれら資料に関する結論を述べると、まず、<sup>①</sup> Дx8644 については、『俄藏敦煌西域文獻』掲載の寫眞には2面しか撮影されていないものの、実際には4面があり(圖1)、粘葉裝(中國語では胡蝶裝に相當する)の一部であることが判明した。

この Дx8644 の内容について、李應存〔2008〕は「脈經節選本」としたが、筆者の照合によれば、S.5614 の『平脈略例』に一致する(表1)。また李〔2008〕が「脈書殘本」と名付けた Дx2869 (II) もまた、S.5614 の『平脈略例』に一致する(表2)。よっていずれも『平脈略例』と名付けるべきである。

また、これに加えて、上海古籍出版社『俄藏敦煌西域文獻』で「診脈醫書」と名付けられていた P.2815 の醫書の抜き書き部分は、『平脈略例』を参照したものと考えられる(表3)。この点では既にそれを指摘していた BnF〔2006〕の見解が支持できる<sup>6</sup>。

以下に釋文の對比によってこれらのことを論證しておきたい。

---

<sup>6</sup>ここ數年のうちに公開された BnF の Consulter la notice dans le Catalogue collectif de France(URL: <http://ccfr.bnf.fr/>) で公開されている Pelliot chinois 2815 の解説でも、『平脈略例』としている。Catalogue des manuscrits chinois de Touen-houang (Fonds Pelliot chinois). Volume II.

圖 1：Dx8644 の立體圖（4 面が存在する。各面の釋文は表 1 の ABCD に對應）

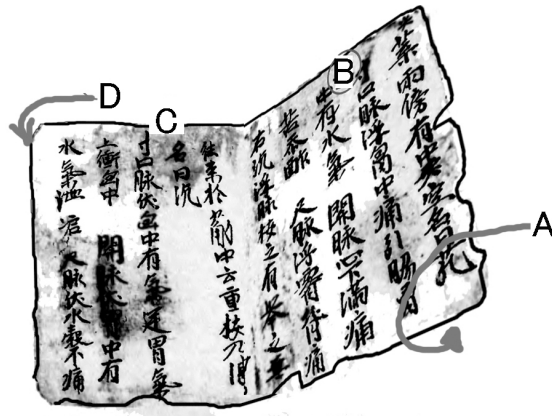


表 1. Dx8644 と S.5614 『平脈略例』の對比（異同は S.5614 側の字を圍った。數字は行數）

Dx8644	S.5614 (47~54 行)
A	A'
01 葱葉状一日浮於無名曰浮／	47(前略) 葱葉状一日浮於／
02 寸口脈朮吐血微朮衄血／	48 無名曰浮寸口脈朮吐血微朮衄血關脈朮胃中 虛微朮吐血尺脈朮下血／
03 關中脈朮胃中虛微朮吐血／	49 微朮小便血右朮脈按之無舉之如按葱
04 尺脈朮下血微朮小便／	
05 右朮按脈之無舉之如案葱／	
B	B'
06 葉兩傍有中央空名曰朮／	葉兩傍有中央空名曰朮／
07 寸口脈浮胸中痛引脇胸／	50 寸口脈沉胸中痛引脇胸中有水氣關脈沉心下 滿痛苦忝酢尺脈沉／
08 中有水氣關脈心下滿痛／	51 腰背痛 ㊦ 沉脈按之有舉之無
09 苦忝酢尺脈浮腰背痛／	
10 有沈浮脈按之有舉之無／	
C	C'
11 往來于筋中、云重按乃得／	51 往來於筋中云重按乃得名曰沉／
12 名曰沉 　／	52 寸口脈伏胸中有氣逆胃氣上衝胸中關脈伏胃 中有水氣泄瀉 尺脈／
13 寸口脈伏胸中有氣逆胃氣／	53 伏水穀不 ㊦
14 上衝中關脈伏胃中有／	
15 水氣泄瀉尺脈伏水穀不痛／	
D	D'
16 右伏脈按之乃得舉之不足一云／	53 右伏脈按之乃得舉之不足一云極重按之至骨 乃得名曰伏／
17 極重按之至骨乃得名曰伏／	54 寸口脈弦胸中急心下幅々滿痛關脈弦胃中有 冷上下急(後略)
18 寸口脈弦胸中急心下幅々滿痛／	
19 關脈弦胃中有冷上下急／	

表 2. ㄨx2869 (II) と S.5614 『平脈略例』の對比 (特に一致する箇所をゴチックで示した)

ㄨx2869 (II)	S.5614 (43~54 行)
01 ] 心下有毒憂患 [	43 寸口脈陰沉絶者無心脈也苦心下毒起憂患／
02 ] 脈也苦挾齊痛腸 [	44 寸口脈浮陽絶者無小腸脈也苦挾齊痛腸中疝瘕王月即上搶心／
03 ] 也苦心下急痛心腹 [	45 寸口脈陰實者小腹實也苦心下急痛心腹有熱小便難赤黄／
04 ] 痛關口脈腹滿不欲食是 [	46 凡寸口脈浮中風發熱頭痛 關脈浮腹滿不欲食是虚滿／
05 ] □□有□又如按葱葉然 [	47 尺脈浮小便難 右浮脈安之不足舉之有餘又如按葱葉状一日浮於／
06 ] 脈芤胃中虚微芤吐血 [	48 無名曰浮寸口脈芤吐血微芤衄血關脈芤胃中虚微芤吐血尺脈芤下血／
07 ] 之無舉之如按葱葉兩傍有中央 [	49 微芤小便血右芤脈按之無舉之如按葱葉兩傍有中央空名曰芤／
08 ] 痛引脇胸中有水氣關脈沈、心下 [	50 寸口脈沉胸中痛引脇胸中有水氣關脈沉心下滿痛苦忞酢尺脈沉／
09 ] 奇沈脈按之有舉之無往來于筋 [	51 腰背痛右沉脈按之有舉之無往來於筋中云重按乃得名曰沉／
10 ] 中有氣逆胃氣上衝胸中關脈 [	52 寸口脈伏胸中有氣逆胃氣上衝胸中關脈伏胃中有水氣泄瀉 尺脈／
11 ] 脈按之乃得舉之不足一 [	53 伏水穀不化右伏脈按之乃得舉之不足一云極重按之至骨乃得名曰伏／
12 ] 急心下□ [	54 寸口脈弦胸中急心下愒々滿痛關脈弦胃中有冷上下急胃氣虚／

表 3. P.2815v と S.5614 『平脈略例』の對比

P.2815	S.5614 (22~25 行、24 行目除く、異同のある箇所は S.5614 側を線で囲った)
1 寸口脈浮陽絶者無大腸脈也苦少氣心下有水秋節病歎嗽／	22 寸口脈浮陽絶者無大腸脈也苦少氣心下有水秋 <sup>㊦</sup> 病歎嗽／
2 寸口脈陽實者大腸實也苦腸内切痛如針刺無休息／	23 寸口脈陽實者大腸實也苦腸内切痛 <sup>㊦</sup> 針刺無休息／
3 寸口脈陰實者肺實也無脈也苦脈也／	25 寸口脈陰實者肺實也 <sup>㊦</sup> 苦少氣胸滿彭々與肩相引痛／

以上のように、ㄨx8644 は S.5614 『平脈略例』(47~54 行) と、ㄨx2869 (II) と S.5614 『平脈略例』(43~54 行) とテキストがほぼ同じであり、P.2815v の醫藥書の抜き書き部分は、S.5614 『平脈略例』(22~25 行、24 行目除く) ときわめて一致する部分が多いのである。

このようにみていくと、とりあえず①~⑫は假に以下のように命名できよう。行論の都合上、寫本の形態を付記し、次節で論じる『平脈略例』については、下線を付した。



- ① P.2115 五臓論・平脈略例、卷子本
- ② P.2815v 平脈略例抜抄、一紙
- ③ P.3287 脈經関連醫書、卷子本
- ④ P.3477 玄感脈經、卷子本
- ⑤ P.3481 脈經関連醫書、卷子本
- ⑥ P.3655 明堂五臓論・七表八裏三部脈・青烏子脈訣、折本
- ⑦ S.202 辨脈方または傷寒論辨脈、卷子本
- ⑧ S.5614 五臓論・平脈略例、粘葉装
- ⑨ S.6245+S.9431+S.9443+S.8289 平三關陰陽二十四氣脈、卷子本
- ⑩ S.10527 鼠漏脈證殘卷、斷片のため不明
- ⑪ Дx2869 (II) 平脈略例、粘葉装
- ⑫ Дx8644 平脈略例、粘葉装

### 三、敦煌における脈書『平脈略例』の書寫年代

以上のようにみていくと敦煌本脈書 12 點中、『平脈略例』(斷片含む)が 5 點あるが、それらは同一寫本の一部とは認められず、殘存している敦煌本脈書として最も多いといえる。『平脈略例』は經籍志類には著録されていないことから、宮中に所藏されていなかったと考えられる一方で、敦煌では廣く普及していた脈書のテキストであった可能性を考えて良いであろう。ただし殘存數が直接的に當時存在した典籍の數を示すとは限らず、斷定はできない。そして以下がその 5 點である。

- ① P.2115    ② P.2815 v    ⑧ S.5614    ⑪ Дx2869 (II)、⑫ Дx8644

では『平脈略例』はいつ頃の敦煌で普及していたと考え得るのか。これまで醫藥書の書寫年代が明確に論じられたものは數少なく、従來の研究の多くは避諱字や書體を手がかりにしているが、敦煌文獻の他分野の研究同様、まずは寫本の形態や、背面等に書寫されている内容との關係を探っていくべきであり、避諱字を書寫年推定の最有力條件とすべきではないであろう。

とくに重視すべきは寫本の形態である。卷子本の場合、その形態だけからでは年代の絞り込みは困難だが、粘葉装の年代は 9 世紀をさかのぼらない(藤枝〔1991:219-221〕)。したがって、粘葉装の形式である⑧⑪⑫は、9 世紀以降のすなわち歸義軍期の書寫と考えられる。

また①②の斷卷は背面が利用されていることに注意すべきである。それは第一利用面と利用過程を特定できれば、書寫年代をある程度絞り込める可能性がある

からである。これらの観点からそれぞれの資料の特徴を整理すると次のようになる。

① P.2115 の形態は卷子本で、背面は「窮詐辨惑論」である。

② P.2815v は単葉の料紙で、背面は張氏歸義軍期の「國忌行香文等」である。

⑧ S.5614 は単體の醫書ではなく、人體の治療と無關係の各種占法と醫書との抜抄が併記されたもので、その一部が『平脈略例』にあたる。

①については、「五臟論・平脈略例」のテキスト面は、裏寫りしている「窮詐辨惑論」の文字を巧みに避けるように書かれていることから、「窮詐辨惑論」が一次利用面と推測される。また卷子本であるため、形態からは年代を限定しづらいが、粘葉装の例が2、3ある「平脈略例」の寫本としては比較的古い可能性がある。また、「窮詐辨惑論」は三階教のテキストのひとつとされており、そのテキストは敦煌文獻中、この一點のみである。西本〔1998:224〕は「窮詐辨惑論」面の字體などから8世紀半ば以降の寫本とし、テキストとしては所引の書籍名などから7世紀半ば以降の成立とみている。したがって、「五臟論・平脈略例」の書寫は8世紀半ば以降と推測される。

②については、背面が張氏歸義軍期の「國忌行香文等」であり、同種の文章が背面のP.2815v面にも及んでいるので、「國忌行香文等」の下書きを二次利用して、空いている箇所に『平脈略例』の抜き書きをしたとみられる。那波〔1974: 37-48〕はP.2815「國忌行香文等」を検討し、資料中で宣宗を「當今大中皇帝」と記していることから、宣宗期（846～859）の文章と判断した。それにしたがえば『平脈略例』の抜き書きは宣宗期か、それ以降のもの（9世紀半ば以降）ということになる。

上述の脈書のうち、『平脈略例』ではないものの、⑥ P.3655 の形態は折本で、「明堂五臟論」「七表」「八裏」「三部脈」「青烏子脈訣」の順に見出しがあり、複数の醫藥書からの抜抄となっている。この点では① P.2115、⑧ S.5614 などと類似しているが、①が卷子本、⑧が粘葉装ということ視野に入れると、⑥はとくに⑧と書寫年代が近いと想像され、9世紀以降とみることが出来る。この⑥ P.3655 には醫術と關係がない落書きが多數書き込まれており、しかも同一人物の手によると思われる。

以上のようにみていくと、敦煌本『平脈略例』の書寫時期は寫本ごとに異なるものの、早くとも8世紀半ばで、おおよそ9世紀半ばくらいかそれ以降のものとして想定される。

このような寫本の特徴からみて、その書寫者に近い既知の存在として、敦煌歸義軍の「州學」「陰陽」に勤務した者たちをあげることが出来る。背面が張氏歸義

軍期の「國忌行香文等」である②と、醫書と占術書の一部を抄寫したとみられる  
⑧ S.5614から推測した。例えば、彼らによる題記として次のようなものがある。

P.2675 陰陽書殘卷（複数の占術書の書き抜きから成る）

題記：咸通二年(861) 歲次辛巳十二月廿五衙前通行并通事舍人范子盈, 陰陽汜景  
詢二人寫記。

P.2856 發病書<sup>7</sup>

題記：咸通三年(862) 壬午歲五月寫發病書記。

P.2859 逆刺占

題記：州學陰陽子弟呂辨均本、是一一細尋勘了也。天復四載(904) 歲在甲子夾鐘  
潤三月十二日呂辨均書寫。

ただし、以上の資料と絞り込みでは、『平脈略例』の書寫者に近づいたかもしれないが、特定したことはないだろう。今後さらに精査していきたい。

## おわりに

本稿では以下のことをあきらかにした。

- 1) 敦煌脈書として「玄感脈經」「平脈略例」「七表八裏三部脈」「青烏子脈訣」という題名をもつ寫本がある。
- 2) D<sub>x</sub>8644、D<sub>x</sub>2869 (II) は、『平脈略例』寫本の一部で、P.2815 は『平脈略例』の抜き書きとみられる。
- 3) 『平脈略例』は、9世紀半ば以降に敦煌で広く流通していた脈書だったと考えられる。
- 4) 敦煌本『平脈略例』を書寫した者の候補として歸義軍期の「州學」「陰陽」に勤務した者たちをあげることができる。

## <参考文献>

- 三木榮〔1959〕「スタイン敦煌文書 S.202 と現傳「宋板傷寒論」辨脈法竝に「金匱玉函經」辨脈との比較・附 S.5641、S.6245 「平脈略例」」、『漢方の臨床』6 卷 5 號、3-28 頁
- 宮下三郎〔1963〕「隋唐時代の醫療」、藪内清編『中國中世科學技術史の研究』角川書店、259-288 頁

<sup>7</sup>發病書については、岩本篤志〔2015b〕に詳述した。

- 那波利貞〔1974〕「唐の開元・天寶初期の交が時世の一變轉期たるの考證」、同『唐代史社會文化史研究』創文社、11-196頁
- 王淑民〔1987〕「敦煌脈書『玄感脈經』初探」、『上海中醫藥雜誌』1987年第8期、37-38頁
- 叢春雨〔1994〕『敦煌中醫藥全書』、中醫古籍出版社
- 小曾戸洋〔1996〕「敦煌文書および西域出土文書中の醫藥文獻」、同『中國醫學古典と日本』塙書房、589-655頁
- 馬繼興等輯校〔1998〕『敦煌醫藥文獻輯校』、江蘇古籍出版社
- 西本照眞〔1998〕『三階教の研究』、春秋社
- 王淑民〔2001〕「四個英藏敦煌脈書殘卷的綴輯研究」、『敦煌研究』2001年第4期・總70期、129-133頁
- 余欣〔2006〕『神道人心——唐宋之際敦煌民生宗教社會史研究』、中華書局
- 眞柳誠〔2007〕「大英圖書館所藏の敦煌醫藥文書(4)『平脈略例』」『漢方の臨床』第54卷7號、1074-1076頁
- 李應存〔2008〕『俄羅斯藏敦煌醫藥文獻釋要』、甘肅科學技術出版社
- 丸山裕美子〔2009〕「北宋天聖令による唐日醫疾令の復原試案」『愛知縣立大學日本文化學部論集. 歴史文化學科編』第1號、21-40頁
- 王淑民〔2012〕『英藏敦煌醫學文獻圖影與注疏』、人民衛生出版社
- 眞柳誠〔2014〕『黃帝醫籍研究』、汲古書院
- 岩本篤志〔2015a〕『唐代の醫藥書と敦煌文獻』、角川學藝出版
- 岩本篤志〔2015b〕「敦煌吐魯番「發病書」小考——ロシア・ドイツ藏文獻の試釋と『古事略決』との比較を通して」、前掲『唐代の醫藥書と敦煌文獻』、245-271頁
- 馬繼興〔2015〕『中國出土古醫書考釋與研究』、上海科學技術出版社

(作者は立正大學文學部講師)